毎月1回20日発行　　（昭和31年3月28日第3種郵便物認可）

山と博物館

編集　大町山岳博物館

冬眠している

モモジロコオモリ

長野県上水内（かみみのち）郡鬼無里（きなさ）村瀬戸（せど）不動の滝の洞くつにむらがって冬眠しているモモジロコオモリ、一つの群は数10頭におよび、お互に翼で体をつゝみ、体をすりよせている。

NO.23　1957年11月20日　大町山岳博物館発行

またくる春まで
コオモリたち冬眠に

善光寺のある長野市から西へ7K、もみじにいろどられた裾花（すそばな）川の清流にそってさかのぼると、がけにかけられた幾つもの滝の間に、洞くつがところどころに見られます。この洞くつの一つをコオモリたちが集団で冬越しするために利用しています。コウモリは、冬眠の場所やその姿勢に、いろいろ変ったものがあります。イエコオモリは人家の近くで、キクガシラコオモリなどは洞くつや古い鉱山の跡などに群集して冬眠します。ウサギコオモリ、テングコオモリなどは群（むれ）になっていることもありますが大木の穴とか小鳥の巣箱などの中にもぐっていることもあります。しかし、いずれの場合でも、大てい後足の爪を岩や樹木の表面にひっかけて頭を下にしてつるさがっています。冬眠からさめるとそのような場所は、ひるま姿をひそめて休む場所となり、夕方になる頃飛び立ってえさを求めて歩きます。

写真上　グロテスクな顔をしたキクガシラコオモリ　写真左　彼らはこの穴にすんでいる

11月も中旬を過ぎて、霜が降ったりして冬のきざしが現れだすと善光寺の西方のコオモリも冬眠に入り始めます。写真に見られるこの冬眠の穴は入口がくずれており、巾は3m、高さ2mのほら穴ですが、内部に入ると巾は4mくらいになります。人間の手で掘られたもので深さは200mくらいあります。この穴にはテングコオモリ、キクガシラコオモリ、コキクガシラコオモリ、モモジロコオモリなどが集り、入口から30米位入ったあたりから奥の岩壁のくぼみにかたまって冬眠します。100米から奥はコキクガシラコオモリやモモジロコオモリが多くなり、密集している場所では10平方糎に20頭くらいが集って、一つの群には数10頭が群っています。そして一頭一頭は翼で体をつつみ体をすり寄せています。

コオモリの冬眠は、クマやカエルの冬眠とは少しちがっています彼らの体温は、環境の温度がある点まで降下するにつれて降りますが、それ以下に環境の温度が降下しても体温は降らずにかえって上昇します。冬眠に入る最低の体温は約5°Cで体温が低くなっていますから、消費するエネルギーも少なくてすむわけです。しかし、ときどき体温が上昇して目覚めることがあり、そのときには体内の物質を消費するので彼らの体重は冬眠の終り頃になるといちじるしく減少してしまいます。たとえばキクガシラコオモリの体重は、冬眠からさめる頃には40%も減少しています。呼吸数も変化します。活動しているときは1分間200回以上ですが、完全に冬眠しているときは2～3回呼吸をしては数分間とまりますから、平均してみると1分間に一回呼吸をするかしないかです。

こうして彼らは変化してゆく生活環境にともなって彼らの生活様式を変えながら環境に順応してゆきます。

（編集部）

【写真は「キクガシラコオモリの顔」のほかは信大教育学部学生、山岸哲氏によるものです】

写真上　単独で冬眠しているモモジロコオモリ　写真左　後足の爪を岩にひっかけ頭を下にしてつるさがっているキクガシラコウモリ

白馬岳で採集姿の河野先生（中央）一行、後方の山は旭岳

【写真上】白馬小屋の前で生徒とともに【写真下】大正5年8月東久邇宮殿下の御案内の時、白馬岳大雪渓を行く一行。

河野齢蔵先生

山でつくられた郷土の科学者

どこまでも美しいものに山がある。山は古くから生活の中に生き、そして人々はみな山を愛してきた。心の糧（かて）となり、そこに山の幸を求めたり、信仰の道場としてあるいは物資の交易などの必要からであった。時代の変化とともに山は拓けてきた。文明も夜明け、明治もまもない頃――猟師ときこりのみであった 山へ――未知の世界にあこがれてくる人々があった。高山植物の研究や地質学の調査、測量など、山の開拓は科学と探検から始まった。

この頃北アルプスのふもとの村に河野齢蔵という先生がいた。慶応元年東筑摩（ひがしちくま）郡、島内（しまうち）村に生まれ、父の秀れた教養一論語、歌道、絵画、造園などをみにつけて、育った。明治22年上水内（かみみのち）の小学校に先生をして以来50年、信州教育に終始し、特に理科教育の振興に、登山の奨励に努めた。

明治26年、始めて乗鞍岳に登り、動植物の採集を行ない科学を目的とする登山の第一歩をふみ出した。同31年には岡田邦松氏らと白馬岳に登り、以後日本アルプスはもちろん、白山、北海道など各地の山を採集に歩いた。白馬岳は実に20数回におよんだ。この間、高山や高山植物に関する多くの著書をあらわした。ことに植物培養の技能はすぐれ

邸内の高山植物園、花壇は広く観覧者も訪れるほどにみごとなもので、各地にこのような施設をつくった。晩年、東久邇宮（ひがしくにのみや）殿下ほか、宮さまの案内役もつとめた県内では文化財の調査、博物学会、山岳会の創設の功労者であった。

古武士的な風ぼうの持主で、高山であえば仙人のような感じがする人であった。信濃の山河がつくった郷土の偉人であり、信濃教育界に学術に、また近代登山の開拓者である日本アルプスの雪も消え始め、庭先きの梅が咲こうとする昭和14年4月3日75才でなくなった。

（編集部）

【写真左】　河野先生宅で培養中の高山植物の一部
【写真下】　高山植物の写生図と趣味の色紙

上原遺跡の出土品本館へ

上原（うわっぱら）遺跡の出土品をこんど博物館で保管することになり、11月12日東京の国学院大学から送られてきました。今まで大学で研究されていたもので、同遺跡は縄文前期の単純遺跡であり、ことに興味深い配石祉が発見されました。近く一般公開されますが、県の教育委員会から「上原」という調査報告が出版されました。

☆……編集部から……☆

ご愛読のほどお礼申上げます。発刊以来23号を数えました。この機会にさらに内容、編集ともに、一段と充実した紙面にいたし、みなさんの「山と博物館」として育成していきたいと存じます。編集や内容に対するご意見やご希望をぜひ博物館までお寄せ下さい。

山岳会

京都大学山岳部

京都府市左京区吉田

創立は昭和21年、現在部員は35名、機関紙はCIimbing Journalを発行している。

撮影機と映写機が

新しく撮影機と映写機が入りました。撮影機はアメリカのベル、アンド、ハウエル社製16mm、映写機はエルモ16mmです。博物館の普及事業や学習活動に使用されるとともに、記録映画の製作も行われます。

〝房子〟（ふさこ）さんときまる

新しく入園したかもしかの名前を募集しておりましたが、11月15日までに45名の方から、立派な名前がよせられました。さっそく博物館の関係者が集まって選んだ結果、中房という産地の名前から命名された〝房子〟さんと決まりました。入賞者は次の通りで、近く賞品が送られます。

入賞	房子	志村　寛	（東京都）
準入賞	町子	片瀬　健晶	（大町市）
		井出はる子	（大町市）

お願い　本紙の購読御希望の方は **1年分購読料170円（郵送料共）** を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。　**大町山岳博物館**

文化の日に

文化の日を中心に文化祭が開かれました。好天にめぐまれ観覧者は五千名をこえる盛況でした。博物館では染色展と南極展が好評でした。染色展は同好会のグループの出品が56点に招待作品が光彩をそえました。南極展はペンギンの生態展示や隊員の装備、オングル島の岩石などが興味を集めました。

写真は南極展と染色展の一部

黒部上流に雪量計

黒部川上流雨量調査の一環として、冬期観測のために雪量計が14台、周辺の山に設置された。これは雪を塩化カルシウムで融かして降水量を計るものです。

【写真は雪量計の設置に】

同好会のあゆみ

新しいグループが発足し、それぞれ活動を始めました。11月24日には、染色の会は蝋けつ染から型染を始め、26日には星をみる会（銀河会主催）、登山同好会は遭難史、登山史、地形名の由来などのまとめに入りました。同好会の活躍は今後に期待するものがあります。

【博物館だより】 自記雨量計撤集（薬師方面）　**26日**同好会染色の会　**27日～31日**文化祭展示会準備　**28日**同好会山の歌声　**11月1日～5日**文化祭展示会（**1日**移転開館祝賀会）**6日**同好会山の歌声　**7日**同好会星をみる会発足（会員30名名称銀河会）　月触観測　**10日**市民合唱祭（同好会山の歌声参加）　**12日**館員会　**17日**同好会染色の会　登山同好会発足（会員30名）

（今月の寄贈）　ホシガラス1体大町市六日町**降旗一雄**　マンネンタケ2本大町市常盤西山**山下純一**　ノスリ1体大町市神栄町**宮沢小住、降旗藤美子**　ヤマドリ1体大町市九日町**山野井芳政**　アンドン1点トアオリ1台大町市八日町**太田稲作**　（敬称略）

山と博物館　No.23　1957.11.20発行
発行所　大町山岳博物館
長野県大町市神栄町電話211番
印刷所　信州印刷株式会社